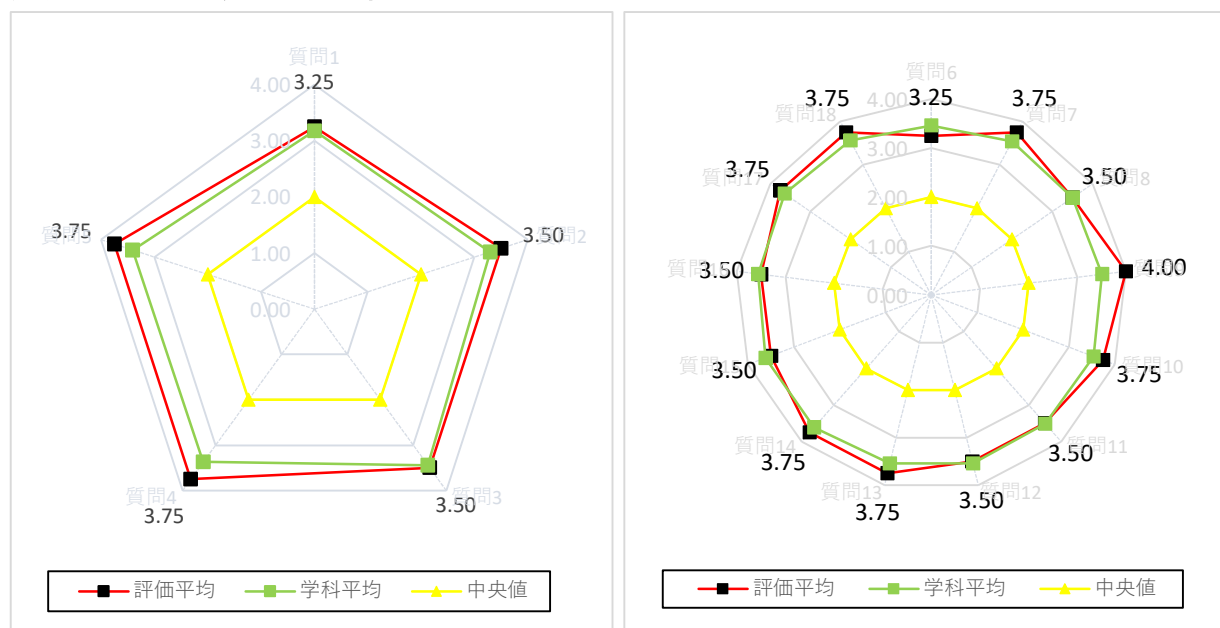


学部	学科	担当者	科目名	履修者数
デジタル社会共創学環	デジタル社会共創学環		あすなろう	6名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

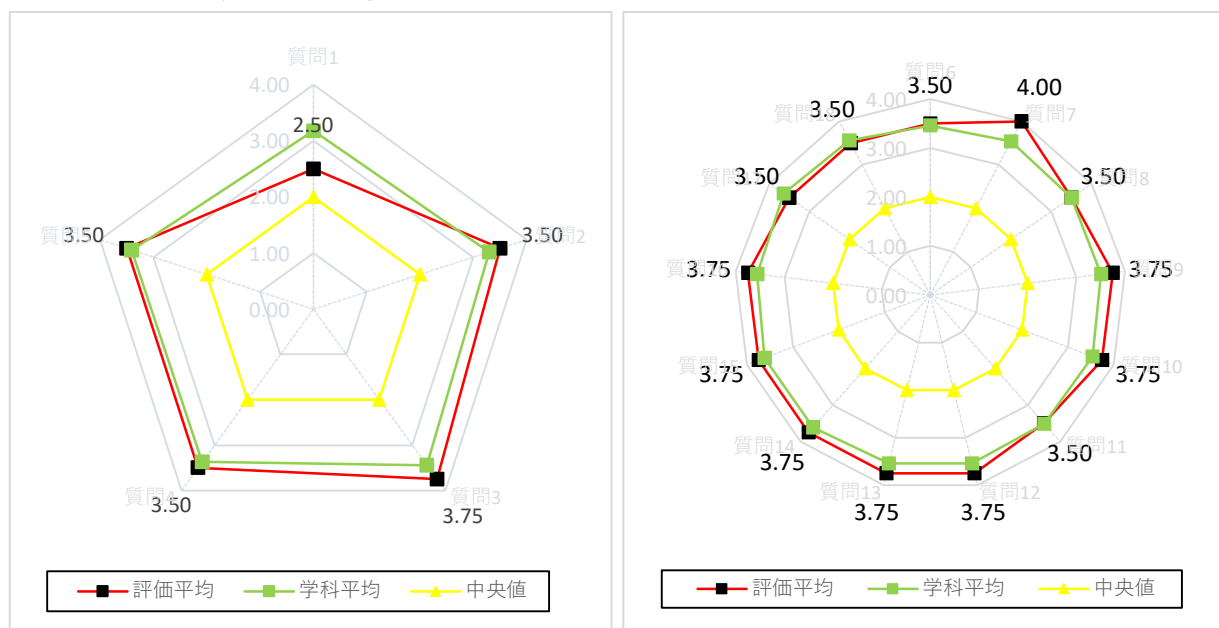
本授業「あすなろう」の授業評価平均得点は、全18項目中すべての項目において学環平均を上回っており、特に項目9・14・17・18などでは4.00点前後と高い評価が得られた。これは、授業内容の理解しやすさ、学修への意欲喚起、教員の関わり方に対する評価が高かったことを示している。一方、項目1・6・16では学環平均との差が比較的小さく、授業全体の位置づけの明確さや学修サポートのさらなる工夫が求められると考えられる。総合的には、双方向的な授業展開や学生の主体的参加を促す工夫が一定の成果を上げたと評価できる。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度に向けては、高評価を得た学生参加型の活動や対話的な授業構成を維持・発展させつつ、授業冒頭での到達目標や各回の位置づけをより明確に提示する工夫を行う。あわせて、授業理解に不安を感じる学生に対して、ミニ振り返りやコメント返却の機会を増やし、学修過程を丁寧に支援する体制を整える。さらに、学生の意見や疑問を次回授業に反映するフィードバック型授業を強化することで、安心して参加できる学修環境を醸成し、全体的な満足度と学修効果の一層の向上を目指したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
デジタル社会共創学環	デジタル社会共創学環		あすなろう	5名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

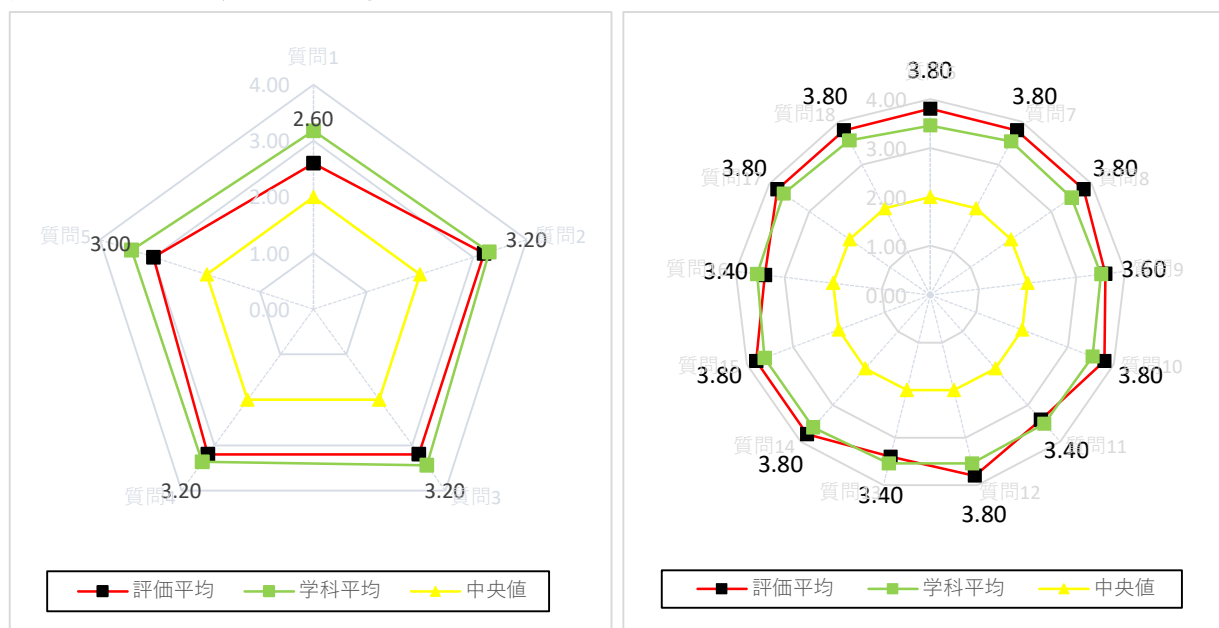
特に（質問7）「教員は授業の到達目標を明確にして、授業を展開していましたか。」は評価が高く、授業内での目標の明確化が大きな要因と考えられた。

(3) 次年度に向けての取り組み

授業準備を入念に行い、授業内での学生との双方向的な指導にさらに注力する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
デジタル社会共創学環	デジタル社会共創学環		あすなろう	5名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

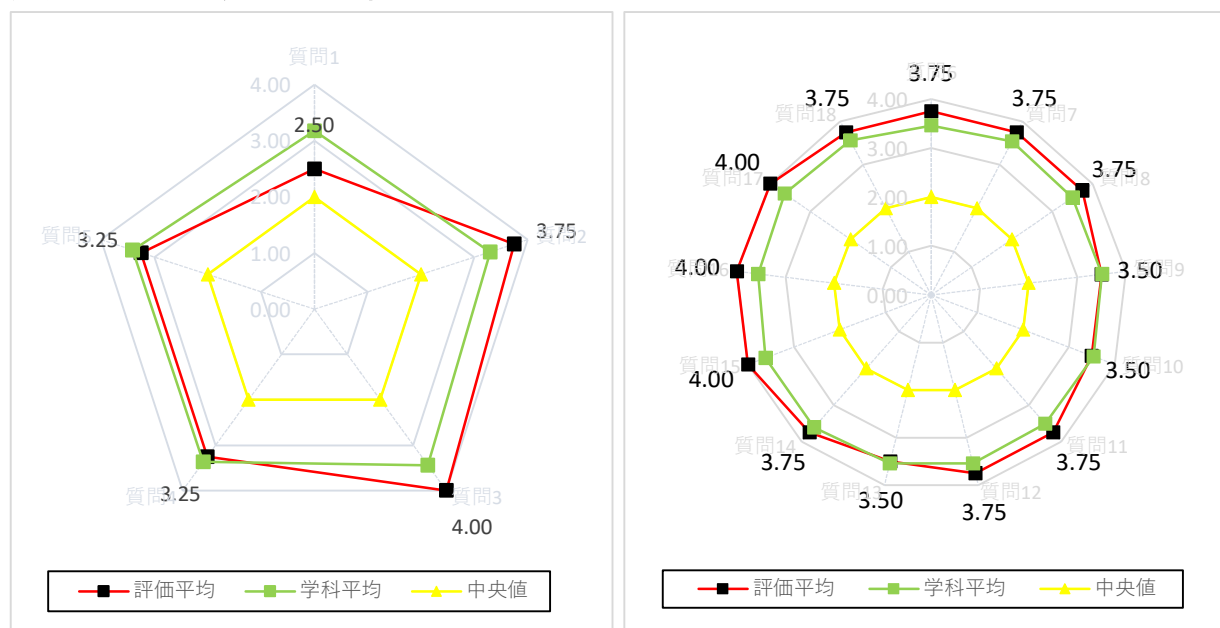
- 学科平均との比較：概ね平均よりも5%前後の改善が見られた。
- 特に低（高）い項目についての考察：Q16の点数が低い理由は、双方向の会話が少なかったことが挙げられる。一方、Q10の評価が高い理由は、適切にITC機器を利用できたことと考えられる。
- 自由記述についての分析と評価：特に記述は見られなかったので、学生も概ね満足したものと考えられる。
- 本授業の目標、ねらいと照らし合わせた分析と評価：特に授業に参加した留学生に対しては、日本の文化や学習方法を懇切丁寧に伝達したことで、彼らの日本文化・習慣の理解が深まり、学習意欲の向上に繋がったと考えられる。
- 授業全般に対する反省点：担当の先生方と分担しながら、学生1名1名に丁寧な対応ができたものの、そのために時間を要してしまい、授業内容の進捗具合が多少遅れてしまった点である。
- 回答率に関して：私が担当する学生にチャットやEメールで呼びかけたために、100%の回答率を得られたと考えられる。しかし、手間暇がかかり他の業務に支障が出る場合もあるので、徹底的に回答を回収するのもバランスを考えなければならない。

(3) 次年度に向けての取り組み

- 授業評価結果で特に低かった項目に対する改善方法：Q16に関する双方向の授業の低評価を改善するためには、参加人数と時間的な制約があるものの、授業時間の3%程度の時間をコミュニケーションに充てることを考えている。
- 授業全般の反省点に対する取り組み方法：概ね学生の満足度は高いので、現状のまま取り組んでいく予定である。
- 次年度に新たに導入したいと考えている授業方法など：低評価の項目（コミュニケーション時間）を多少改善するために、適切な時間配分を考えて、学生とのコミュニケーションを試みるつもりである。
- 授業評価そのものに対する意見：特に留学生への丁寧な対応は必要なので、現状のような授業を心掛けたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
デジタル社会共創学環	デジタル社会共創学環		あすなろう	6名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

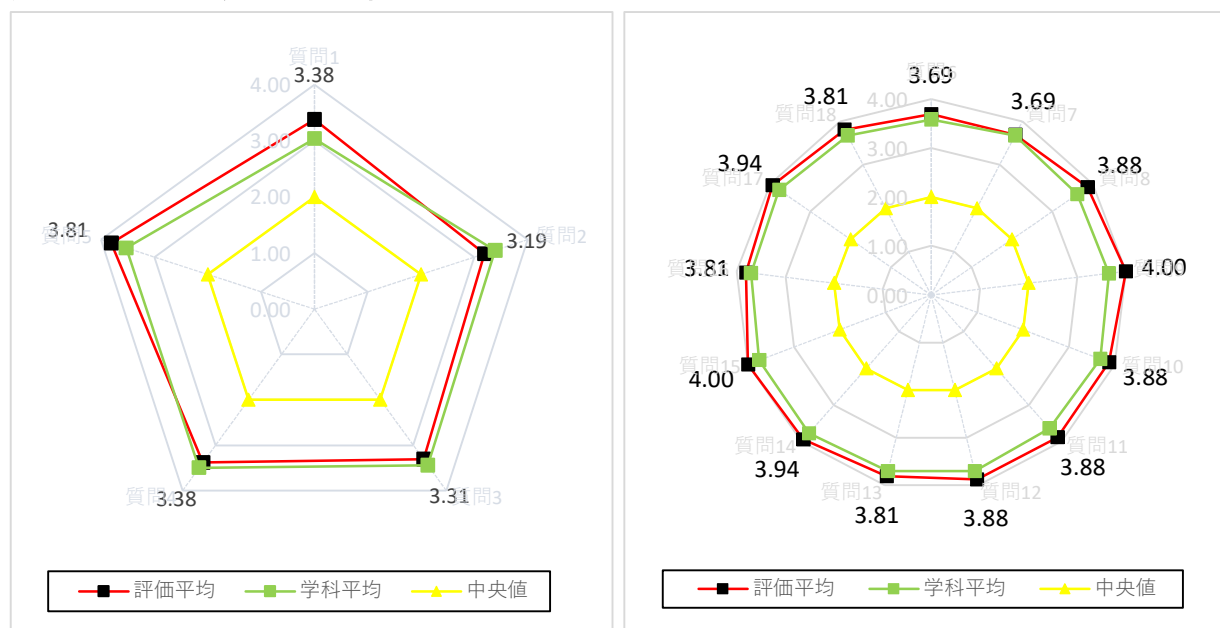
授業評価コメントから、授業内容の体系的な学修目標の明確さについては一定の評価が得られており、特に授業の進行速度や説明の丁寧さについて肯定的な意見が多く見られた。一方で、専門用語や課題の難易度に関しては理解に差が生じたとの指摘もあり、受講生の基礎学力や経験の多様性への対応が課題として浮上している。また、講義中心の回では理解の定着に不安を感じる学生も一定数存在し、双方向性や演習の充実を求める声が確認された。これらの結果から、本授業は基本的な教育目標は概ね達成しているものの、学修の深まりと主体的参加を促す点において、さらなる改善の余地があると評価できる。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は、学生の理解度のばらつきを踏まえ、導入部分での用語解説や事前学習資料の提示を充実させるとともに、授業内での確認時間を意識的に確保する。また、短時間のディスカッションやペアワーク、振り返りシート等を取り入れ、学生が能動的に思考・発言できる機会を増やす。課題については段階的な難易度設定を行い、評価基準を明確にすることで学修の見通しを持たせる。さらに、授業評価の中間的なフィードバックを活用し、学期中にも授業方法の微調整を行うことで、理解度と満足度の双方の向上を図りたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
デジタル社会共創学環	デジタル社会共創学環		臨床心理学概論	40名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

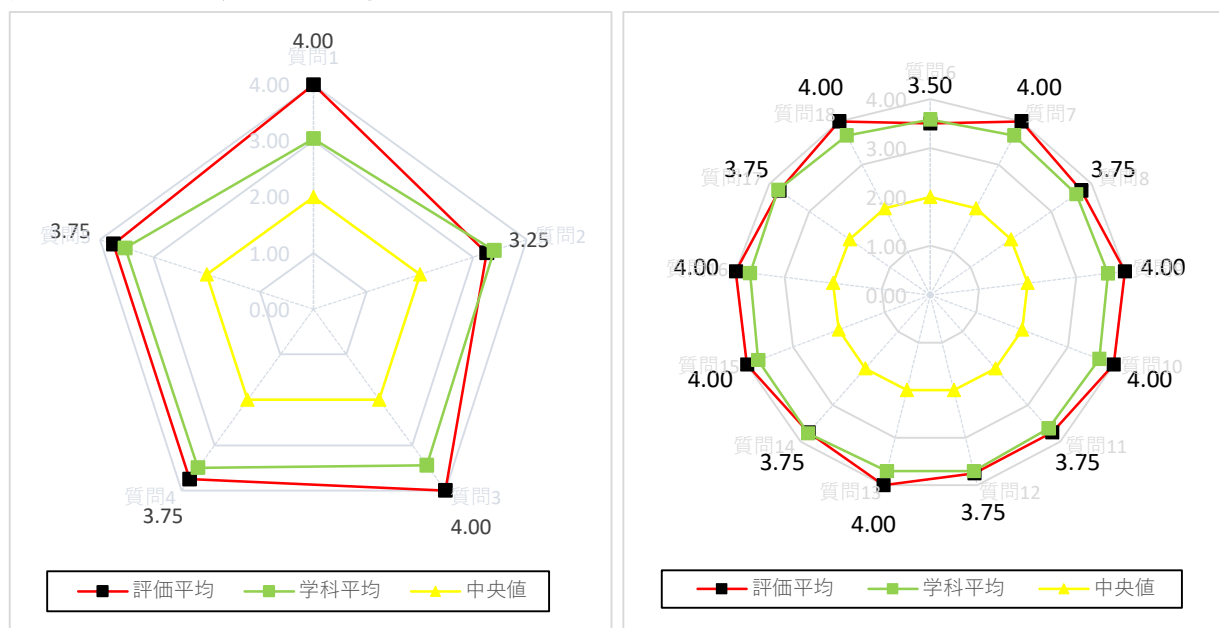
本授業の評価平均は、多くの項目において学環全体の平均を上回っており、とくに授業内容の理解度、学習意欲の喚起、授業への満足度に関わる項目では高い評価が得られた。臨床心理学という専門性の高い内容でありながら、具体例や事例を用いた説明、学生の関心や実生活と結びつけた構成が、理解の促進につながったと考えられる。一方で、授業の進行や難易度に関わる一部項目では学環平均をやや下回る結果も見られ、内容の情報量や進度について学生間で感じ方に差があった可能性がうかがえる。全体としては、専門性と分かりやすさの両立が一定程度達成されている一方、初学者への配慮や学習ペース調整が今後の課題であると評価できる。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は、高評価であった点を維持しつつ、学習進度や理解度のばらつきに配慮した授業改善に取り組む。具体的には、授業冒頭での到達目標の明確化、内容の要点を整理したスライド構成、復習用資料やミニ確認の導入により、学生が自分の理解度を把握しやすい授業設計を行う。また、専門用語や理論については段階的な説明を心がけ、必要に応じて質疑や短時間の対話的活動を取り入れる。これにより、臨床心理学への関心と理解をより一層深め、主体的な学びにつながる授業の実現を目指す。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
デジタル社会共創学環	デジタル社会共創学環		科学的介護論	9名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

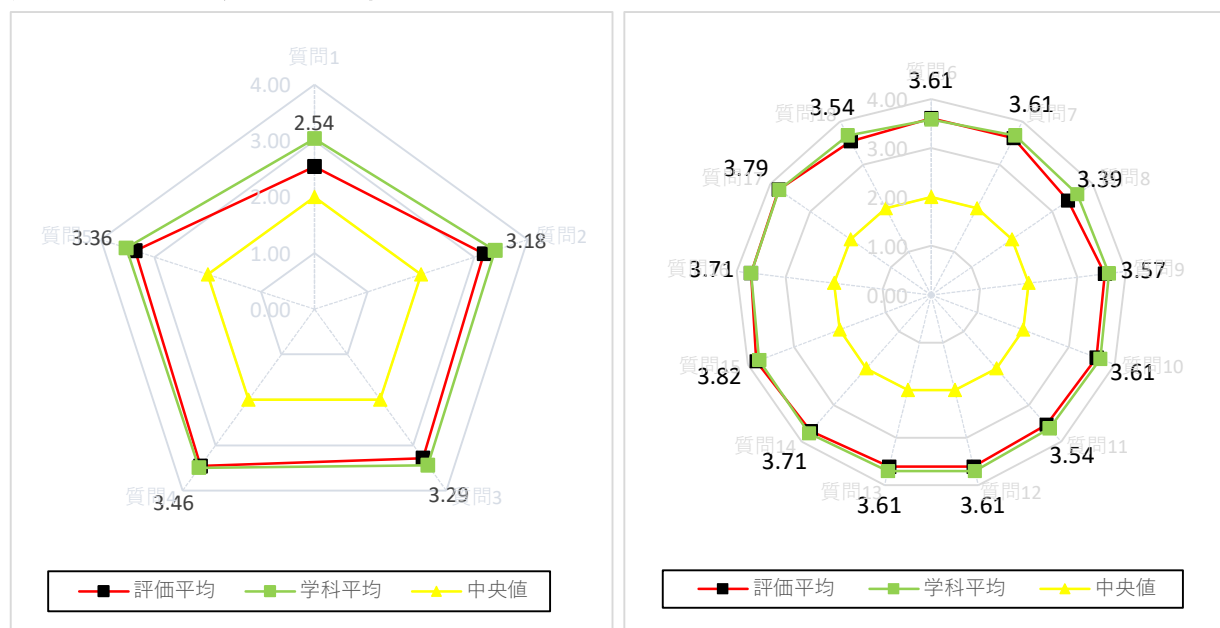
【評価の低い項目（特に質問2・6シラバス）について】 シラバス全体像や授業の到達目標・回ごとの位置づけについて、学生への説明（この授業がシラバスのどこに位置づくのかなど）が十分とは言えなかった。シラバスと授業内容との関連がわかりにくかった可能性もある。

(3) 次年度に向けての取り組み

初回授業でシラバスを用いて科目全体の構成や到達目標を明確に説明するとともに、各回の授業においてもシラバスとの関連を適宜示す。今回の評価をもとに、オムニバス担当者間で事前・事後の打合せを行い、共通理解のもとで授業運営と改善を図る。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
デジタル社会共創学環	デジタル社会共創学環		ダイバーシティ論	32名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

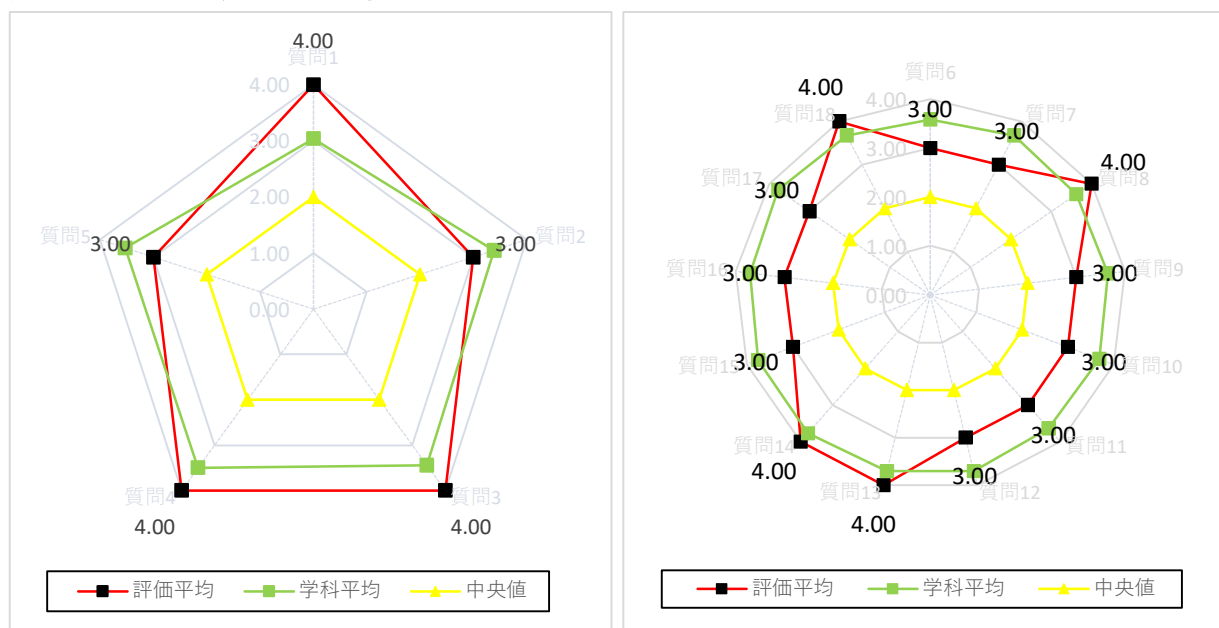
本授業はオムニバス形式で実施され、全体18項目中、私の担当回においては多くの項目で学環平均と同程度、あるいは上回る評価が得られた。特に「授業内容への理解」「学習意欲の向上」「多様な視点から考える力」に関する項目（15?17番）では平均値を明確に上回り、ダイバーシティを心理学的・社会的観点から具体例を用いて扱った点が、学生の学びにつながったと考えられる。一方、授業初期の項目や構成理解に関する評価（1?3番、8番等）は学環平均をやや下回っており、オムニバス特有の授業意図や位置づけが十分に共有できなかった可能性が示唆された。以上より、専門性を生かした内容面の評価は一定程度得られた一方、導入や全体像の提示に改善の余地があると評価できる。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度に向けては、オムニバス授業の中での自担当回の位置づけや到達目標を、冒頭でより明確に示す工夫を行う。具体的には、初回に学修目標と他回との関連を視覚的に示し、学生が学習の見通しを持てるよう配慮する。また、ディスカッションや事例検討の目的を事前に共有し、学習活動と評価項目との結び付きを意識化する。さらに、授業終盤に短い振り返り時間を設け、学んだ内容を整理・言語化する機会を確保することで、理解度と満足度の向上を図りたい。これらを通して、ダイバーシティを「知識として理解する」だけでなく、「自分事として考える力」をより一層育成する授業改善に取り組む。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
デジタル社会共創学環	デジタル社会共創学環		フィールドワーク論	3名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

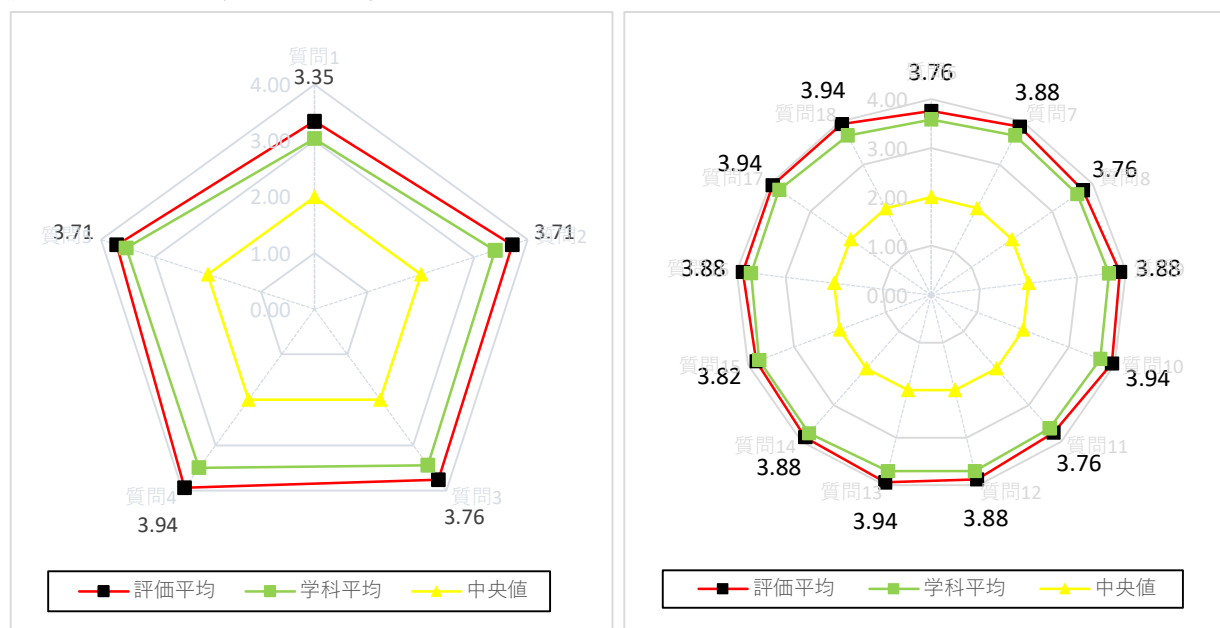
フィールドワークを体験するという授業の性格上、座学的な授業の工夫は今一つであったと思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

座学的な内容において、より学生の興味を引く、よりわかるような丁寧な授業につとめたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
デジタル社会共創学環	デジタル社会共創学環		心理学と社会課題	40名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

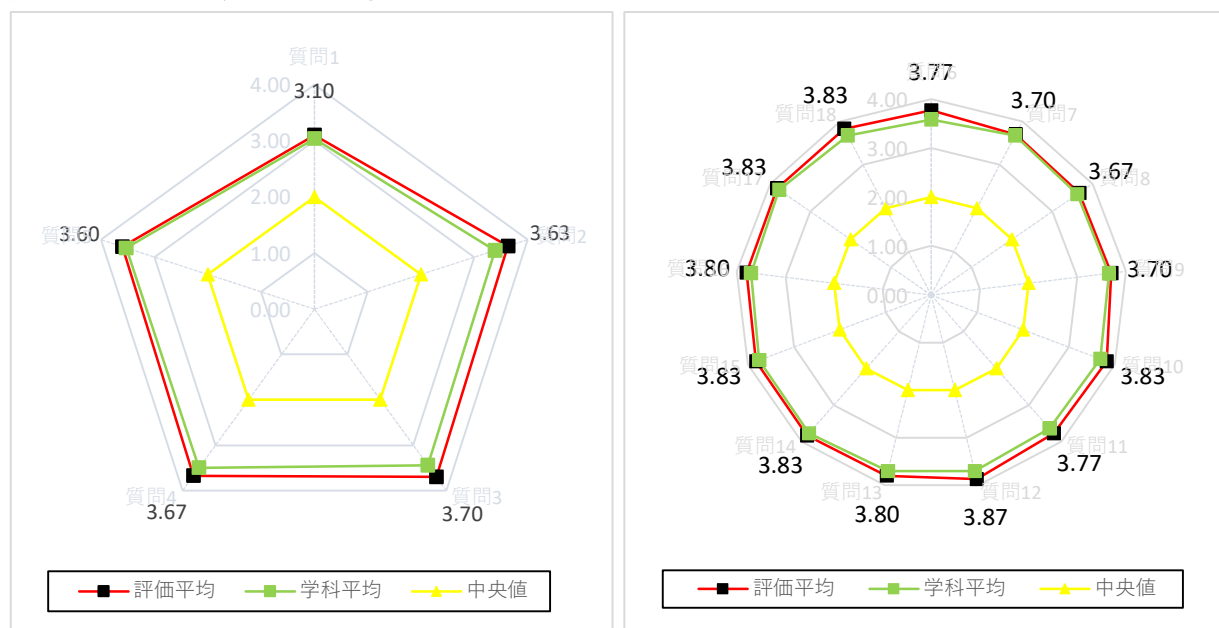
本授業「心理学と社会課題」は、デジタル社会共創学環の質問項目平均値（2.85～3.73）と比較して、全18項目において概ね高い評価を得た。特に4・10・13・17・18番では3.94と十分に高い数値を示しており、授業内容の理解しやすさ、社会課題との関連付け、学修意欲の喚起といった点が評価されたものと考えられる。本授業はオムニバス形式であり、私自身は10回を担当したが、その中で毎回グループワークや振り返りを取り入れ、学生が自ら考え、意見を表現する機会を重視したことが好評価につながったと考えられる。一方、項目1では学環平均より高いものの、他項目に比べるとやや低めであり、授業全体像の早期共有や学修目標の明確化について、さらなる工夫の余地があると受け止めている。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度に向けては、高評価を得た点を維持しつつ、授業初期段階での見通しの共有を一層強化する。具体的には、初回においてオムニバス全体の構成と本授業の位置づけ、到達目標を視覚資料で明確に提示し、学生が学修の意義を早期に理解できるよう工夫する。また、社会課題と心理学の接続がより実感できるよう、学生の身近な経験や地域課題を扱うミニ事例を増やし、発言が苦手な学生も参加しやすいペアワークや記述活動を取り入れる。あわせて、最終回だけでなく途中段階での簡易アンケートや振り返りを活用し、学生の理解度や困り感を把握しながら授業改善につなげていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
デジタル社会共創学環	デジタル社会共創学環		情報数学入門	31名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

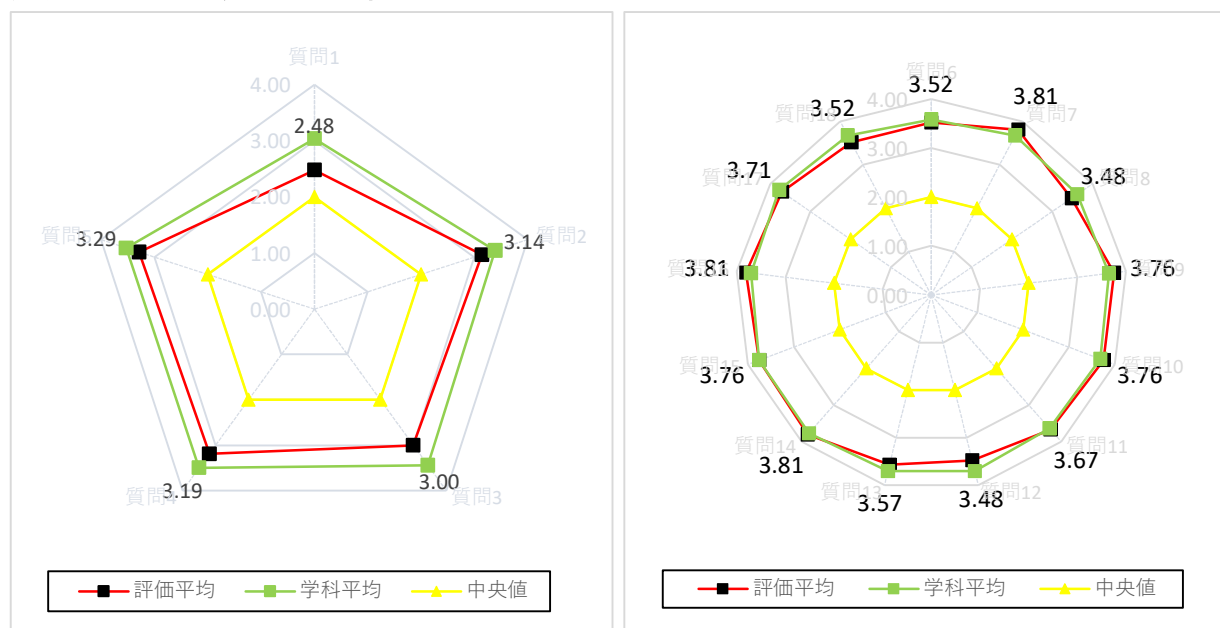
- 学科平均との比較：殆どの項目で、平均点前後の高評価が得られた。
- 特に低（高）い項目についての考察：Q7の評価点が低い理由は、授業の目標到達を進捗具合によって変更しなければならなかった点を詳細に伝えていないことが問題であったと考えられる。一方、Q10&Q12では、高評価であった。留学生を多く含み、レベルが異なる学生に対して、ICT機器などを適切に利用したことが評価につながったと考えられる。
- 自由記述についての分析と評価：殆どコメントがなかったので、概ね満足であった学生が多かったと考えられる。
- 本授業の目標、ねらいと照らし合わせた分析と評価：再試も含む殆どの学生が合格点を取得したので、情報数学の基礎をキチンと学修でき、目標を達成できたと考えられる。
- 授業全般に対する反省点：Q18の平均点レベル（高評価）にあるので、学生の満足度は概ね高いと考えられる。
- 回答率に関して：授業中の回答に加え、欠席した学生にチャットやEメールで呼びかけたお陰で、殆どの学生から回答を得られた。ただし、高回収率を求めるためには、個別に連絡するなどの手間暇がかかることが課題である。

(3) 次年度に向けての取り組み

- 授業評価結果で特に低かった項目に対する改善方法：Q7の点数は過少評価であったので、少し丁寧な説明と共に、到達目標を明確にし、授業展開を心掛けたい。
- 授業全般の反省点に対する取り組み方法：Q18を確認すると、概ね学生の満足度は高いので、現状を維持しつつ、理解力が不足気味な学生に対して丁寧な説明に取り組んでいく予定である。
- 次年度に新たに導入したいと考えている授業方法など：授業に取り残されそうな学生について、できるだけ積極的なコミュニケーションを試み、彼らの理解を促したい。
- 授業評価そのものに対する意見：時間が限られている中で、また、学力不足の学生が多く集まる中で、いかに効率的に授業準備とその評価ができるように工夫したいと思う。学生の中にも、Eメールやチャットを確認しない者もいるので、必ずメッセージを読むように促したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
デジタル社会共創学環	デジタル社会共創学環		情報数学入門	27名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

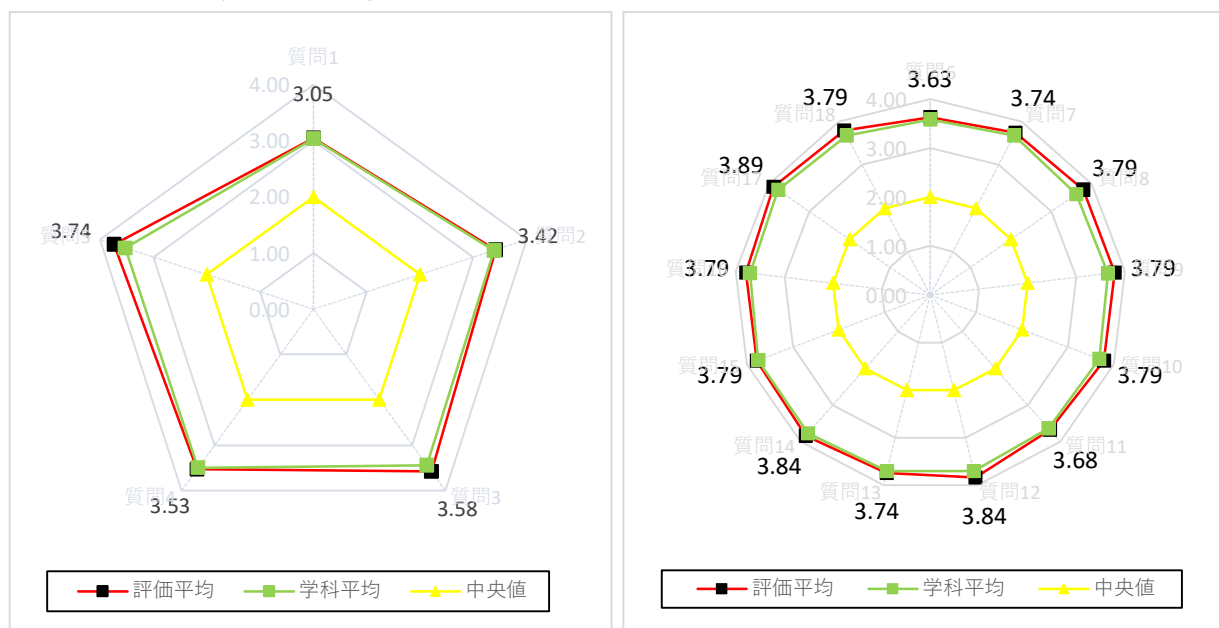
「情報数学入門」は、情報技術を学ぶために必要な数学の基礎を講義した。高等学校での学習内容との重複する部分もあるが、集合、論理、命題、関数、グラフなどの内容を講義した。学生にとっては、苦手と感じる内容であったと想像しているが、基本的なところから講義したことで、ある程度は理解できたのではないかと想像している。毎回の小テストも、学習内容の確認に役立ったと想像している。欠席がちな学生や、講義を聞いていない学生は、内容についていけなくなっていたと想像している。

(3) 次年度に向けての取り組み

2026年度も、2025年度と同様の内容で実施する予定である。講義資料の説明を充実させるなど、学生が授業についていきやすくなるように工夫する。また、数学は演習問題を解くことで理解が深まるため、自習用の演習問題を提供するなど、学生が自主的に学習できるように工夫する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
デジタル社会共創学環	デジタル社会共創学環		PBLゼミナール I	41名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

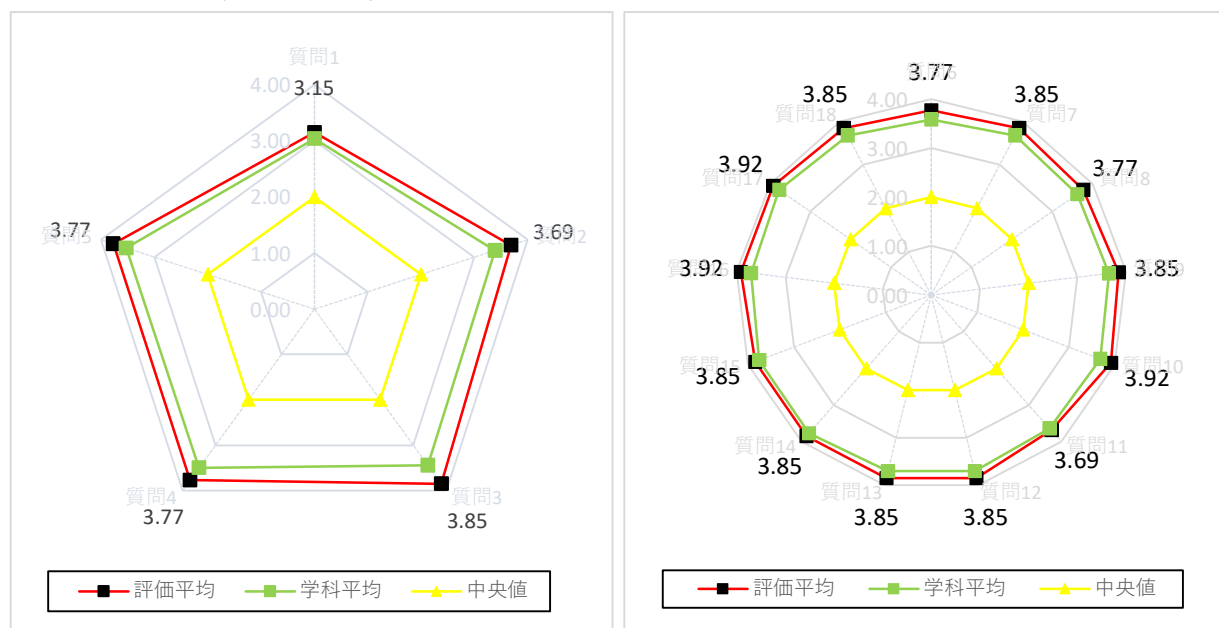
学環全体の平均値と比較すると、本科目「PBLゼミナール I」は、設問1においてやや低い結果であった一方、多くの設問で学環平均を上回る、あるいは同等の高い評価が得られている。特に、学修内容の理解、主体的な参加、協働的学習、学びの充実感に関わる設問（概ね3～18番）では一貫して高得点であり、PBL型授業としての特徴が学生に肯定的に受け止められていることが示唆される。グループワークや対話を重視した授業設計が、学生の関与度や満足度を高めたと評価できる。一方で、授業全体の導入や目的理解に関する設問では改善の余地があり、初年次教育としてより丁寧なガイダンスの必要性が示された。総合的には、学環の教育方針に沿った能動的学修の成果が数値として表れた結果であると考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度に向けては、PBLの意義や到達目標を授業初期により明確に伝えるため、初回授業でのオリエンテーションの充実や、授業全体の見通しを可視化した資料の提示を行う。あわせて、各回の活動と評価基準との関連を明確にし、学生が安心して主体的に取り組める学修環境を整える。これまで高く評価された協働学習や振り返り活動については継続・発展させ、個々の学生が自身の学びを言語化できる機会を増やす工夫を行う。また、学生の理解度や不安を早期に把握するためのミニフィードバックを適宜取り入れ、授業改善に即時反映させることで、初年次PBLとしての教育効果のさらなる向上を目指したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
デジタル社会共創学環	デジタル社会共創学環		PBLゼミナールⅡ	39名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

本授業の授業評価平均は、全18項目すべてにおいて学環平均を上回っており、特に「授業への満足度」「学びの深まり」「主体的な参加を促す工夫」に関わる項目で高い評価が得られた。学環教員全員出席の全体授業であったことに加え、日本語能力N4以下の留学生が大半を占めるという学修条件の中でも、PBL形式により役割分担・協働作業を通して参加しやすい学習環境を構築できたことが、評価の結果に反映されたと考えられる。一方、学環平均との差が比較的小さい項目もあり、学修意図の言語化や評価基準の共有については、さらなる工夫の余地が示唆された。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は、本年度の高評価を維持・発展させるため、留学生の日本語能力差をさらに考慮した学習支援を強化する。具体的には、指示文・課題内容の「やさしい日本語」化、視覚資料の一層の活用、活動手順の明確化を行う。また、PBLにおける学修目標・評価基準を事前に丁寧に共有し、学びの見通しを持たせることで、不安軽減と主体的参加を促進する。加えて、教員間の連携を深め、全体授業としての一貫性と学びの質を高める工夫を継続していきたい。